

ヨーロッパの言語に男性名詞と女性名詞があるが、これが日本人には面倒だ。 どうしてその区別があるのか教わることもなく、ただ覚えなければならぬのは少々苦痛であり、身に付かない。 あるフランス人に、どうして男性名詞と女性名詞があるのか聞いてみた。 すると、「フランス人にとってもそれは *problème* (問題) だ。 でも、日本語で **を** と書くところを **お** と書くことと変でしょう。 名詞の性を間違えると、それと同じ様な変な感じがする。」との答えであった。 これには妙に納得力があつた。 なんて外国語はこう面倒なのだ、と不満に思いながら勉強している訳だが、その国の人がその区別を大切にしているならばそれに従おうと思うものだ。

イタリア語の *Crescere* を辞書で引いてみると、わたしの使っている *Harper Collins Concise Italian Dictionary* では自動詞としては *to grow* となっている。 *Crescendo* はその現在分詞だ。 ラジオイタリア語講座では例文として、「体重が増えてきた。」の増えているのも *crescendo* だそうだ。 *Decrescendo* のもとの形 *Decrescere* は同辞書では *to decrease* となっている。 これに対し、*diminuendo* の原型 *diminuire* は *to decrease, diminish, die down, die away* となっている。 つまり、小さくなるだけでなく、消えてなくなる様な意味が入っている。 これも区別されるべきものだろう。 なお、*diminuire* は *di+minuire* と考えられる。 *di* はいろいろな意味があり、難しいところだが、二重の *di* か、否定・除去の *di* かと言えば二重の *di* なのかもしれない。 *minuire* の方は現代イタリア語にはないようだが、小さくするような意味であったであろう。 でも *minuto* は形容詞では「小さい」、名詞では「分」を意味する。 分よりさらに小さい単位が必要となり *minuto secondo* (第2の小さいもの) という意味であり、これが現代でも *secondo* (秒) と呼ばれる。 否定・除去の *di* は英語では *dis* となっている事が多く分かりやすい。 *disagree, discover, discourage* 等たくさんある。

英語に *dimension*、(イタリア語では *dimensione*) があるが、これは *di+metri* で「計る」に *di* が付いたものだ。 つまり似ているが語幹が異なる。 *men* ではじまるイタリア語で一番重要な単語は *mente* (英語では *mind* である) であろう。 初歩のイタリア語に *dimenticare* (忘れる) という語があるが、これは *mente* に否定・除去の *di* を付け動詞化したものようだ。 この *mente* は接尾辞として副詞化するのに使われ *probabilmente* は「おそらく」という意味となる。 副詞化するのに「心」が付いているのは面白い。 なお、英語の *mentally* はイタリア語では *mentalmente* となる。 この副詞化する *mente* はフランス語では *ment* となり *vivement* の様に使われるのはご存じの通りである。 心して弾いた方が良さそうである。

イタリア語の動詞 *Staccare* は *to detach* と説明されている。 スタッカート *staccato* はその過去分詞である。 形容詞的に「離れた」という意味で用いられる。 反対語は *legare* であり、同辞書では *to tie* となっている。 その過去分詞は *legato* だ。 ラジオイタリア語講座を聴いていると、*staccato* には短いという意味はまったくなく、また、この2語は夫婦関係を表すのに最適な言葉だそうだ。 気持が結ばれている、離れている、という意味に使われる。 なお、イタリア人夫婦はほとんど *regato* だそうだ。

イタリア語の講座ではこのように大変分かりやすい説明に出会う事が多い。 半過去を「目撃者の過去」と説明している先生がおられた。「あの時、～～してたのは誰？」みたいな事であろう。 なるほど、これなら、反復および継続を表す過去、と言うより分かりやすい。 反復しない、終了した過去は *passato prossimo* であり、これは英語が *have+過去分詞* で現在完了を作るのと同じように作られる。 これを普通の過去形として用いている。 イタリア語の動詞の原形は語尾が *are, ire, ere* の3通りしかなく、それに従って過去分詞が規則的に作られるので普通の過去、つまり *passato prossimo* はとてもやさしい。

イタリア語の辞書を見るとアルペジオ *arpeggio* は *arpa* (ハープ) と関係あることは明らかだ。 研究社の英語語源辞典で *arpeggio* を引くと、*arpeggiare* (ハープを弾く) という語から *arpeggio* が派生したと説明されている。 イタリア語の動詞 *arpeggiare* は現代の辞書には残念ながらない。 しかし、*are* 動詞として使えば通じそうである。 また、アルペジオも *arpeggiare* の現在分詞として考えられるから、実際この動詞は普通に使われていたのかもしれない。 なお、英語語源辞典を見るとゲルマン基語では *harpe* の様に頭に *h* がありイタリア語その他はこれを借用したもの、と説明されている。 イタリア語で *h* は発音されないために、いつしか *h* が落ちてしまう事があるそう

だ。例えば *ospedale*、現代のイタリア語では病院の事だ。ヴィヴァルディが働いていたピエタ養育院も *ospedale* だ。この語にも昔は頭に *h* があった。ただし発音はされなかったそうだ。 *hospedale* ならより英語の *hospital* に対応づけやすい。さて、*harp* のついた語の *harpsichord* も *old French* の *harpechorde* から英語に入ったのだそうだ。なお、語中の *s* については語源辞典では不明としている。イタリア語にも *arpicordo* という語があったが、ハープは弦楽器だから *chord* を付けなくてもよさそうなものだが、なぜだろう。楽器でない「湾曲したもの」を意味する *arpa* があって弦を張った *arpa* という必要があったのだろうか。現代では忘れてしまった何かがあるのだろうか。英語に *harpoon* という語もある。

イタリア語の辞書に *piano*、*cembalo* は *pianoforte*、*clavicembalo* と共に載っている。現代では両方使われるようだ。ただ、*piano* は日常用語であり、形容詞では平らな、水平な、名詞では平らな面、フローア、階、副詞ではゆっくり、と頻繁に使われるので、楽器としては *pianoforte* の方が良い場合もあるだろう。それに *pianoforte* という事によってはじめてピアノの特徴が出る。*piano* では意味が分からない。

語源辞典で *spinet* を見ると、イタリア語では *spina* がとげであり、それに縮小辞を付けて *spinetta* となりフランス語で *épinette* となり、英語では *spinet* となった、という一般的な説明と共に、*Giovanni Spinetti* というベニスの人がこの楽器を発明した説を紹介している。なお、とげがスピネットの語源とすると少し飛躍がありそうだが、16世紀のイタリアではクラヴィコードのことをモノコルド、チェンバロのことをクラヴィコードと呼んでいた。それがだんだん現代の用法になっていく過程で、クラヴィコードと言っても、どっちのことか分からないので、つめのあるクラヴィコードと言う必要性は十分考えられる。ただ、そのつめを *spina* と呼ぶかどうか、16世紀のイタリア人に聞いてみないと分からない。つめはとりの羽でできているので、クラヴィコード・ダ・ペンナの方がありそうに思うが。

イタリア語の辞書で *adagio* を見ると *slowly*、*adagio* と説明されている。しかし、そのとりに *adagiare* があり *to lay down or set carefully* とある。「そっと置く様に」あるいは「注意深く」がアダージョとぴったりの様子がどうか。

また、イタリア語の辞書には *cello* はない。*violoncello* としか言わないからだ。それにこの *cello* は縮小辞だ。*cella* があるがこれは英語の *cell* に相当する。*cello* はヴィオローネの小さいものという意味だ。*violone* は *viola* に拡大語尾 *one* をつけたものだから、語源的には *violoncello* は「ヴィオラの大きいものをちょっと小さくしたもの」ぐらいの意味である。古い楽譜にはバスのところの楽器に *violone* と書いてあるので、*violoncello* という言葉は比較的後の時代に出来たのだらう。なお、英語でその簡略形 *cello* と最初に使われたのは19世紀だそうだ。*cello* と言っているのは英語だけだから、日本でもヴィオロンチェロとした方が良くかもしれない。英語圏でも *violoncello* でまったく問題ない。*violoncello piccolo* をチェロピッコロという人がいたが、これだと縮小辞を2つ並べただけであり、踏んだり蹴ったりでかわいそうである。

英語でも *cell* は小さい部屋、独房、細胞を意味する。もう少しなじみのある言葉としては、ワインセラーのセラーも小さい部屋という意味だ。イタリア語の *celibe* はフランス語では *célibataire* であり、独身の、という意味だが、この *cel* も同じ語源かもしれない。そう考えるとなんだか独身とは、単細胞かあるいは人間として不完全の様に思えてきた。英語では *single* で済ましている事が多いが、英語にもちゃんとラテン語系の独身を意味する *celibate* という言葉がある。ただ、これは新しく、これも19世紀になってから用いられているようだ。これの元となった *celibacy* は古い。ただし、これは独身主義または独身主義者を意味する。これを教えてくれたイギリス人は“Do not say ,clibacy’.” と忠告して下さった。この使い方を間違えて生涯独身を通した、という話は聞いたことはないが、間違えそうな人は *single* で済ませた方が良くだろう。